

ガザの子、希望の主演に 宮城のNPO、現地で映画制作

2015年8月18日16時30分



戦闘で破壊された街角で撮影にあたる桑山紀彦さん（右）とファラッハさん（左端）＝7月30日、ガザ南部ラファ、渡辺丘撮影



1年前のイスラエル軍による攻撃で市民ら2千人以上が亡くなったパレスチナ自治区ガザで、宮城県のNPOがこの夏、地元の子を主人公にした映画を制作している。戦闘で心に負った傷に向き合い、前向きに生きるきっかけをつかんでもらおうという取り組みだ。

7月末、エジプトとの境界に近いガザ南部ラファ。気温40度近い暑さの中、主人公の少女ファラッハさん（11）が、爆撃で破壊された電器店の主人と出会うシーンが撮影されていた。

自らカメラを操るのは宮城県名取市の心療内科医、桑山紀彦さん（52）。NPO法人「地球のステージ」代表だ。2003年にラファに心のケアのための事務所を開き、09年には空爆下で緊急の医療支援をした。

映画制作のきっかけは、昨年6月の心のケア活動だった。「粘土で、忘れられない光景をつくろう」と語りかけられたファラッハさんがつくったのは「血まみれのお母さん」だった。

一家は2006年6月21日、イスラエル軍の空爆に遭った。35歳の母は即死、1歳の弟も病院で息を引き取った。母のおなかには子どもがいた。

2歳だったファラッハさんが当時の様子を覚えているかは分からない。それでも父ニダルさん（49）は「飛行機や発電機の音を聞くと、戦闘機を思い出してこわばる」と話す。

「お母さんのイメージが血まみれでは心の成長がゆがむ。母の愛情や優しさに向き合ってもらいたい」と、桑山さんは考えた。

桑山さんは東日本大震災で被災した子の心のケアにもあたってきた。13年、子どもたちが出演する映画「ふしぎな石」をつくった。津波で荒れた校庭で見つけた暗号文を頼りに、五つの石を集めると天から犠牲者の声が聞こえる、との筋書きだ。

「津波と戦闘の違いはあるが、心の傷という意味では同じ」と、ガザでの映画撮影を思い立った。同様の筋書きで「ふしぎな石～ガザの空」を書き上げた。

五つの石を集めると、そこからファラッハさんの母の声が聞こえてくる。

「ずっと空からあなたを見守ってきました。この世で一番強い人は優しい人。それを忘れないように。これからもたくさんの愛と勇気をあなたへ」

ファラッハさんは「お金がなくても、誰でも診てあげられるお医者さんになりたい」と将来の夢を語る。桑山さんは「やがてはイスラエルの人にも見てもらい、平和な世界の実現に役立てたい」と話す。

映画は8月中に完成予定。日本全国やガザで自主上映を予定している。問い合わせは同NPO（022・738・9220）へ。

（ガザ南部ラファ＝渡辺丘）

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.